① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第24巻 第12号　1979年12月25日　大町山岳博物館

時を告げる鐘

大町市九日町桜井に彈誓寺という尼寺がある。

伽藍が建ち並び、仁科二十七番の札場所の名刹として知られていたそうだが、明治の廃仏棄釈によって、いまでは観音堂と鐘楼を残すのみである。

この鐘楼の鐘は、捨てがね三つを加えて朝の六時から夕方の六時まで、毎時間、時を告げた。山の町の空気は澄み切っていたので、鐘の音は町のすみずみを遠くまで響き渡った。さあ、鐘がいくつ鳴ったからと、人々の生活は鐘の音を合図にして動いた。

鐘楼が大正十三年の火災の折、梵鐘にヒビが入ったとのことで、それからは鐘の音色に独特の響きが加わり、朝夕の六時を告げる諸寺の鐘の音に入りまじっても、彈誓寺の鐘の音はすぐに聞きわけることが出来た。

そして、この梵鐘を毎日かかすことなく打ち続けたのは「おさよ」という女性である。彼女は鐘を打ちはじめて五十年経ったときに表彰された。その後も「おさよ」は一日も休まず時を告げる鐘を打ちつづけた。

あの太平洋戦争の、鳴るもの一切禁止によって、時を告げる鐘を打つことが出来なくなってしまった。その後、金属回収という強制から梵鐘も鐘楼から消えてしまった。その少しまえにおさよさんは亡くなった。

梵鐘のない鐘楼を見ることなく逝ったのはおさよさんにとって、せめてもの幸であったろう。

現在のあしたゆうべを告げる梵鐘は、戦後新しくつくられたものである。

（浦和市東高砂町　横川　通）

彈誓寺　　撮影　丸山善久

雪国の民具（1）

長沢　武

一、歩行用具

雪は歩行者にとって雨より仕末が悪い。歩きにくい上に水が氷点下となって結晶したものであるから冷めたい。固体であるが細かいから、ちょっとした隙間から入り、熱によって水にもどるから仕末が悪い。

山国の履物は草履か草鞋が基本で、無雪季はこれで過す訳であるが、雪が少しでも降ると直接冷たさが足に感じるので、先ず爪先、次いで踵、そして甲を含む足全体の保護、さらに多雪になると腰の保護という順で防雪、防寒が必要となってくる。

(1) 爪先覆

素草鞋の足先を覆うものを一般にツマゴという。ツマは足先、ゴは護であるが、のちにはそれを取り付けた沓を呼ぶようになった。

この爪先覆は藁で編んだり組んだりして作るもので、岐阜県の北部から加茂郡にかけてはこれをハナモジといっている。ハナは爪先モジはカズラのことか、この覆は簡単に藁一握りを草鞋と足先の間に入れてこれをモジって（捻って）作るところからの名称である。同じ岐阜県でも白川郷ではオソッペという。これは富山市周辺で、爪先に限らず足全体を覆うものをウソまたはオソと呼んでいるものと同じで、岩手県遠野方面ではウソフキという。

北安曇地方のものはスッポといい、これを付けた草鞋をスッポワラジという所が多い。

その他材料が藁製であるところから、カサワラ、シブカラミ（シビカラミの訛で、シビは柔かい藁のこと）などと呼ぶ所もあり、それぞれ製法、出来上りの姿形、草鞋への取り付け方も地方により皆少しずつ違うのが特長である。要は足先を寒さから保護できれば良い訳で、藁一握りあればこと足りるもので、カサワラという長野県下で見られたものは、叩き藁のスベ一握りを草鞋と足の指の間にはさみ込み、これで足先を包むという簡単なもので、不用になっても捨てずに木の枝に掛けて残しておき、後から来る人の為にしたという。

(2) 踵覆

雪が少ないと、スリッパ型の前方だけの覆いで足りるけれど、雪が多くなると踵部分や足全体の覆と保護が必要になってくる。そこで足全体を一括覆うブーツ型の沓が考えられるが、脚部の各関節の動きを必要とする山仕事や猟では、足関節の各部を別々に覆うことによって、それ〴〵の機能と運動を阻害しないように考えたのが日本の雪沓の中での短沓であろう。で、踵の部分はこの部分だけ他の部分と別に覆うようにするものが踵覆で、東北でアクトアテ（秋田）アクトガラミ（東北一帯）アクトマキ（秋田県由利郡）アクトモンコ（青森・秋田）などと呼んでいるものがある。アクトとは東北地方で踵のことを呼ぶ。中部地方ではアックまたはアックイ（北安曇地方ではアッケ）九州ではアドである。

踵覆には踵当型と足首を巻くタイプと二型があり、北安曇地方のアトカケ、新潟県西頸城地方のショボケ、東北地方のアクトアテ、アミガケなどが前者に属し、東北地方のアクトマキ、ヘタラマキ、アクトモンコ、北安曇地方でキビスと呼んでいる布製のものが後者である。踵当（キビスアテ）は日常の場合はすぐり藁の一握りを踵に当て、雪の入らないようにその上を雪沓の紐で足首に結ぶだけであった。

(3) スリッパ型履物

爪掛けは草鞋の附属品として取り付け取りはずしが自由にできるものであるが、この爪掛けを履物本体製作の過程で作り込んだものがスリッパ型である。一般にはコンゴウグツ（コンゴウ）と呼ばれている藁製の履物で、長野県下では上水内、北安曇地方などで呼んでいる。（小谷村でゴンゾ）

「北越雪譜」にも載っているもので、新潟県六日町、塩沢などではワラグツ、富山県ではウソカケ（ウソ）ウスカケ、オソカケ、オソグツといっている。

(4) サンダル型

スリッパ型は、遠出や作業性に劣る。そこで草鞋の上に防寒用の爪掛けをほどこした行動性があり、作業用に適する履物としてサンダル型の履物が考え出された。これは爪掛または草鞋の紐を足首に結んで、履物の後部が踵から離れたり脱げてしまうのを防ぐタイプとしたもので、一般にツマゴと呼ばれるものがこのタイプで、宮城県の伊具郡、福島県の会津地方のオソフキ、オソフキワラジ、県内では北安曇地方でスッポとかスッポワラジと呼ぶ藁を編んだツマカケと、ゴンゾと呼ぶ藁を組んだものと二つのタイプがある。新潟県六日町辺で平スッペという履物もこれに属する。

(5) 短沓型

作業には適しているサンダル型では、足首を紐で結ぶわずらわしさがあり、脱ぎ履きの激しい日常用としては不便である。さらにこのタイプだと、踵部分の覆がないので雪がこ
ゝから入ったり、保温性に劣しい。そこで考え出されたのが踵覆があり足首を紐で結ぶ必要のない着脱にスピーデーな短沓型の履物である。

長野県下では上田市付近のコモグツがこれに該当すると思うが他にはあまり知らない。新潟県粟島地方のアクトオソ、同じく東蒲原郡方面のアクトグツ秋田県仙北地方のアクトシベ、新潟県南魚沼地方のスッペイまたはジンベイというもの、滋賀県高島郡でのジンベソ、福島県会津地方から新潟県東蒲原地方のゲンベなどがこれで、アクトは踵、ジンベはシベ製の沓ということで、シベはシビまたはスベといわれる藁の基部の柔かい部分のこと、で、秋田県鹿角郡のスベ、ゴベという沓もこの型である。

(6) 深沓

イ、半長沓

雪深い地方では短沓型の履物では雪が入ってしまうから、長い沓が必要となる。然しあまり長いと歩きにくいので、日常用には歩き安く、履き安い半長沓が便利である。北安曇地方のサッコミというのはまさにこのタイプで、少し大き目に作ってあり、足がすっと入るタイプである。茅野市のツッパメ、アッパグもこれである。青森県東津軽地方では、深

サッコミ

沓は着物のすそをいためるので喜ばず、オオグツという半長タイプの沓を好んで履く。

ロ、日常用長沓

筒型の日常用の長沓は各地でいろ〳〵な名称で使われている。一般にはフカグツと広い範囲で呼ばれているものであるが、地方によって、藁の組み方の違いがある他、筒の上端を編み放しにしておくもの、綺麗に切り揃えるもの、これに布でヘリをつけ着物がいたまないようにしたもの、また折り返して飾り組みにしたものなどいろ〳〵である。

名称の系統では、新潟県六日町でフカスッペ、長野県北安曇地方でスッペンジョ、新潟県南魚沼郡ではフッコミスッペ、蒲原郡ではスッポリ、またはスッポン、中魚沼郡ではツッパメと変化してき、岐阜県奥飛騨ではズンベという。

鳥取県のアラシコギはこの沓にピッタリの名、長野県下水内郡のノウネツという名前は何処から出たのであろう。北安曇から新潟県の一部と宮城県登米郡などではゴンゾ、ゴンゾウ、ゴゾと呼んでいる所があり、短沓の名と混同している。東筑摩郡でいうオナフミも解らない。この沓の新しいものを味噌踏みに用いる所は多いからミソフミなら解るのであるが。

秋田の河辺、仙北、平鹿などではサンベ、タワラシベ、タラコシベ、メラコジンベイなどというそうだ。

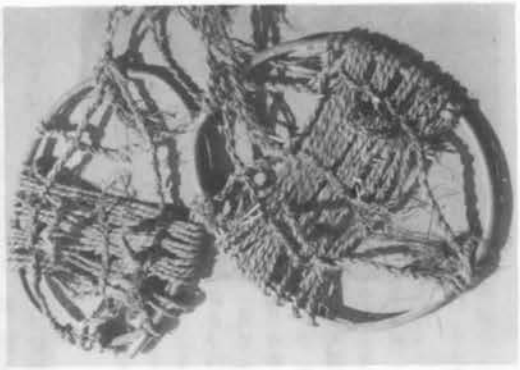
ハ、作業用タイプ

筒型では長くても深雪の場合、筒から雪が入る。そこで、雪山の作業用や道踏み用には、筒の部分が割れてい、履いたらこの部分を左右からしっかり合せ、付いている縄で雪が内へ入らないように縛るタイプのものが用いられる。

茅野市ではウグイス、秋田の平鹿郡ではジタシベと特別な名前がついている。

(7)、キビス

踵のことをキビスまたはクビスという。藁沓を履いて雪山で作業する時は踵覆をするがこの他足首を保護する為に巻く布製のものを北安曇地方でキビスまたはキビスアテと呼んでいる。木綿の刺子で、足首に巻いた上をとけないよう縛る為の紐がついている。鳥取県ではキビサテ、秋田県でアクトマキ、山形県ではアグドカケといっている。



カンジキ

(8)、脛巾

雪中作業用の沓としては、爪掛けをした草鞋に踵覆、踵巻きをし、さらに脛には脛巾（ハバキ）をつけた足仕度が一番足に力が入り、行動し安い。しかも脛巾は雪の付かないものを最高とする。ハバキは広い地域で使われている名称で、これには藁の穂の身の部分で作ったミゴハバキ、シナの木の皮で作ったシナハバキ、畳表のようなガマというトウシン草科の草を編んだガマハバキが一般に使われたが、雪が付かない点で、ガマハバキが最高だった。

ガマハバキは北安曇地方では北小谷の深原産のものが中心で、紺に染めた麻糸で美しく編んであった。ゴム長靴を使用するようになってからは、マキハバキ（巻脛巾）とかマキキャハン、ゲートルという軍隊で使用する布製の巻物も、長靴の上部から雪が入らないように巻くようになった。

(9)、カンジキ

カンジキは樏、橇、榻などの字を当て、『大言海』には、「北国ニテ雪深キ時ニ草鞋ノ下ニ履ク物。板がんじぎ、輪がんじきアリ、上略シテがんじきトモ云、形種々ナリ、裏ニ釘ヲツケテ滑リ蹉クヲ防グ、又皮ニテ作レルモアリ。ガンゼキ。……」と説明している。

国内広い地域でカンジキといっているが、県下の南信濃や兵庫、広島など関西ではユキワとも単にワともいい、新潟県佐渡ではナンバといっている。

イ、普通形カンジキ

現在広く一般に使われているものは、木または竹製のカンジキで、平地や低山で用いるものは直径四十㌢位いの円形、奥山で用いるものはワカンジキと呼ばれ、縦四十㌢横の径二十三㌢位いの木製で、普通二本の木を合せて楕円形に作る。

材としては竹はネマガリダケや篠竹、木では割子ではイタヤカエデ、一本物ではクロモジ、マンサク、アブラチャン、オオカメノキマユミ、コマユミ、クマヤナギなどの親指の太さ位いのものを用いる。立山山麓の芦峅寺で、秋に材を伐っておき冬の間に六百足もワカンジキを作っている佐伯春吉は、ジシヤ（アブラチャン）よりクロモジの方が油気があって雪が付かなくて良いといっていた。

カンジキは主として新雪の深雪や、斜面のゆるやかな所で用い、ワカンジキ（略してワカンともいう）は雪がクラストしてある程度しまった時や、斜面のきつい山で用いる。雪が一層堅く斜面がきつい場合はスリップの危険性があるのでツメと呼ぶ堅木で作った楔型の歯を両サイドにつけたツメカンジキを用いる。東北ではマタギと呼ばれる猟師がもっぱら使うのでマタギカンジキ、北安曇郡の小谷村では形が御櫃（オヒツ）に似ているのでヒツカンジキ、新潟県北魚沼郡湯ノ谷ではアキタカッチキと呼んでいる。

カンジキは深雪に陥るのを防ぐ為のものであるから、輪の内側全面に縄を網状に張ってある。ところがワカンジキではツル（乗緒ともいう）と呼ぶ二本の太いツルで輪の中央を左右から縛めてあるだけで、靴の土踏まずをここに乗せ履くのであるが、歩くと足はこのツルを中心に、踵が上下に動くので疲れず歩き安くなっている。従ってワカンジキの場合はこのツルに全体重がかかるからしっかりした材料でなくてはならない。ツルには昔から牛の生皮が最高とされているが、なかなか入手できないので一般には、籐やアケビ、サルナシ、麻縄などを使っている。

ロ、道踏み用カンジキ

新潟県から長野県の北部北安曇地方では、道踏み専用の径八十㌢もある大きなスカリと呼ぶカンジキを使っている。大きいので歩く時はカンジキの前についている手縄で、カンジキの前を持ち上げながら歩き、雪を踏みかためるのである。

福島県若松地方には、ユキフミまたはフミダワラと呼ぶ、藁で米俵風に編んだ大きな筒状のものに、グミに編んだ取手縄をつけたもので道を踏むが、これもスカリの一種といえるだろう。

ハ、金カンジキ

爪カンジキの歯もたゝないような堅雪の斜面やゼンマイ採りの人が行く岩山の斜面は特にスリップし安いので、鉄製のカンジキが古くから用いられている。カナカンジキといわれるもので、普通三本歯であるが、四本、五本、六本のものもあり、東北地方ではこれをミツメカンジキ、ヨツメカンジキなどと歯の数で呼んでいる。これらは藁沓の下に履くもので、現代の登山家が使うアイゼンやクランポンも同系のものであるが、こちらはさらに歯の数が多くなり、八本、十本もあり、さらに滑り安い氷雪の斜面に用いるものである。

馬橇の馬の足に履かせる水鉄というカナグツもアイゼンのような爪がある。

（白馬村役場・山博調査員）

郷土の生い立ちを考える（1）

平林照雄

私たちの故郷は自然の観察をするのには恵まれております。この自然の中で育てられた私たちにはなつかしい思い出が沢山あります。

このたびは郷土の自然のなりたちについて、地学的な立場から数例をあげて考えてみたいと思います。

一、大町スキー場付近の赤土の層

大町スキー場一帯のなだらかな面（大峰面）に赤土の厚い層があることを知っている人は多いと思います。あの赤土を客土に使ったり、あの中にはさまっている味噌土をさし木用に利用するむきもありますが、赤土の存在について考えてみましょう。

赤土の下には大峰系統の地層（大峰累層）がありますが、赤土はどこからか運ばれてきて、その上に載っているだけです。大峰累層は東へ三〇度も傾斜しているのに赤土の層は、ほとんど水平に堆積していることをみても、また堆積物の性質を比較してみても、全く別のものであることがわかります。このような高いところですから水で流されてきたり、さらに高いところから崩れてきたとしては、水中で堆積したり崩れてきた層の性質はみられません。

赤土に塩酸をまぜてよく洗い、鉱物顕微鏡でのぞいて見ると、火山岩の代表ともいえる安山岩の構成鉱物（角閃石、輝石、斜長石など）がはいっており、もとは火山灰らしかったことがわかります。ありきたりの粘土や土とは違うものであることがわかります。

赤土の層は十一mもの厚さがあり、一m余の厚さの軽石の層（浮石層）をはさんでおり、途中には一時地表になっていた時できたチョコレート色の部分もあって、風によって運ばれてきて他の雑物を混ぜずに堆積したものであることがわかります。日本の上空は西風が強い（偏西風帯）ので、火山灰を供給した火山は堆積地域より西方にある場合が一般的です。大町から西方へ二〇kmのところに爆烈火口をもった立山火山があり、岩石の性質からみても、この火山が供給源と考えられます。

火山灰というものは名前のように灰色が普通ですが、あのような赤土色になるのは気候と関係があり、現在の日本の気候ではできません。今から一万年以上前の氷河時代（洪積世の最終氷期）のある時に、寒冷な気候のもとで堆積した火山灰が風化したものだと推定されます。このような赤土を一般にローム層（正しくはテフラ）と呼んでおり、信州の各地にあるものを信州ローム層といい、関東地方のものは古くから関東ローム層と呼ばれており有名です。ローム層の上部は腐植が混入して黒土になっておりますが、母材はローム層の一部分です。氷河時代の立山火山の噴出物が、西風に乗って大町へ来て十一mもの厚さで堆積しているのですから驚いてしまいます。なんでもないような赤土がこれだけの推論をめぐらせてくれるのですから再び驚歎させられます。

大町スキー場東のローム層の露頭、黒線より下が基盤の大峰累層

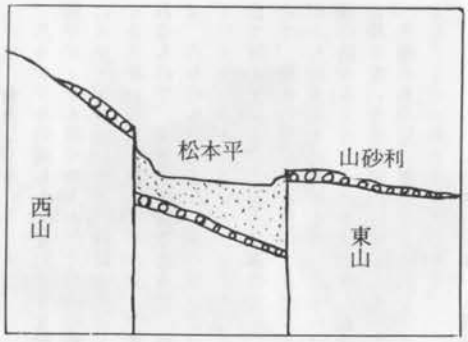
二、山の上にある河原の大石

大町の東山の尾根や平坦面（大峰面）には二mを越える巨大な石が散在しております。この石は河原で丸くされた河床礫（れき）で、下にある大峰累層の中からぬけ出したものではありません。大峰累層中にも礫がはいっておりますが、大きくても数十cm大までです。石の種類は大町の西山にあるものと同じ（高瀬型花崗岩や木崎岩）ですから、なにかの理由で運ばれてきたものでしょう。前項のローム層より古い時代ですから、この辺に人類はまだ住んでおりませんでした。もちろん機械力などで人為的に運び上げたなどとは考えられません。

自然の力で運ばれたとしても、松本平を飛び越えたり、高瀬川の河原から舞い上がれるはずはありません。このように山の上にある河原の石ですから私たちは山砂利（大峰礫層）と呼んでおります。

山砂利の運ばれた謎を解くには、松本平が出来る以前に時間を戻してみることです。松本盆地は簡単にいえば、数十万年前（洪積世中期）に両側の断層を境にして落ち込んだものです。盆地が出来る前は、西山と東山とは地形的に連続しており、その表面を西から東へと流れる河川があって、砂礫を運び出していたと考えられます。この当時は氷河時代であり、西山が急に高さを増した頃でもありますから、今の高瀬川以上に巨礫を運び出す力があったのでしょう。盆地になった部分の山砂利は切り取られて、松本平の新しい堆積物の下に深く埋められてしまいましたが、東山の部分にあったものは大峰面上に残ったわけです。山砂利の運ばれ方が正しいとすれば、逆に松本盆地が落ち込んで出来たことの証明にもなるわけです。実はこのような山砂利は全国各地の山間盆地の周辺で報告されているのです。東山の山砂利は長い間に沢へ転落し、石材に利用されてしまったものも多いのですが、注意して見ればいくらでもあります。何十年も前に西山から運ばれて、取り残された河原の大石が、東山の尾根に座り込んで、松本平を見つめているのも、地球の歴史の大きいスケールの一駒といえましょう。

（梓川高等学校長）



山砂利の運ばれ方の模式図

山と博物館　第24巻　第12号
一九七九年十二月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額　八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）